

今週の為替相場見通し(2024年8月19日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.07 ~ 149.40	147.60	145.00 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		1.0912 ~ 1.1047	1.1028	1.0850 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		160.34 ~ 163.90	162.80	161.00 ~ 164.50
英ポンド	(ドル)		1.2747 ~ 1.2945	1.2942	1.2700 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	186.97 ~ 192.03	191.11	188.00 ~ 195.00
豪ドル	(ドル)		0.6565 ~ 0.6671	0.6671	0.6450 ~ 0.6750
(1豪ドル=)	(円)	*	96.25 ~ 98.91	98.47	94.50 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 145.00 ~ 150.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

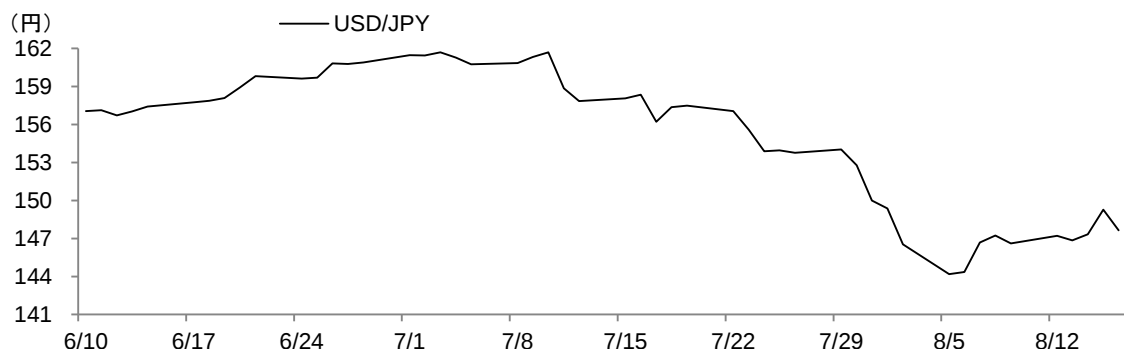
先週のドル/円は週後半にかけて急上昇した。週初12日、147.05円でオープンしたドル/円は、本邦休場で薄商いの中、148円前半までじり高。ただ、その後発表の米7月NY連銀1年インフレ期待が前回より低下したことを受け、米金利低下と共に147円台前半まで反落した。13日、ドル/円は株高を好感し148円手前まで上伸後、米金利低下に合わせ小幅安となった。海外時間は、米7月生産者物価指数(PPI)が予想を下回ったことを受けて更に米金利が低下し、連れてドル/円も146円台半ばまで下落した。14日、ドル/円は岸田首相の自民党総裁選不出馬報道に円買いが加速し週安値の146.07円まで下落も、すぐに切り返し147円台を回復。海外時間は、概ね予想通りの内容だった米7月消費者物価指数(CPI)の発表直後は売り買い交錯したが、その後は米金利の動向に合わせて方向感に欠ける値動きとなり、1日を通して147円を挟んだもみ合い推移となった。15日、ドル/円は本邦4~6月期GDP(速報値)が予想を上回ったものの影響は限定的で147円台前半で小動き。海外時間は、米7月小売売上高や米新規失業保険申請件数の強い結果にドル買いが加速し、週高値の149.40円まで急伸。16日、ドル/円は米7月住宅着工件数が予想を下回り147円台半ば付近まで下落し、その後も戻りは鈍く同水準にてクローズした。

今週のドル/円相場は週末にイベントを控え、もみ合いの展開を予想。基本的には、週後半にジャクソンホール経済シンポジウム等の開催を控え方向感に乏しい推移が継続しそうだ。ジャクソンホール経済シンポジウムでは、23日(金)にパウエルFRB議長の講演を予定しており、今後の米国の金融政策に関する宣言の場とされる可能性があることから警戒されそうだ。また、同日に衆参財務金融委員会の閉会中審査が開催されることとなり、参考人として植田日銀総裁の出席が要請されている。日銀金融政策決定会合後の世界的な株価乱高下などを受けて、先月の会合内容について説明をする予定となっており、植田日銀総裁の利上げに対する姿勢などについて注目が集まりそうだ。今週は、21日(水)FOMC議事要旨、22日(木)米8月製造業PMI(速報値)、米7月中古住宅販売件数、23日(金)米7月新築住宅販売件数の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/12~8/16)の値動き:

安値 146.07 円 高値 149.40 円 終値 147.60 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1100 161.00 ~ 164.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週半ばに急伸し1.10台を回復。週初12日、1.0913でオープンしたユーロ/ドルは、米経済指標の結果を受けた米金利低下を材料に1.09台前半で小幅高となった。13日、ユーロ/ドルは欧州時間は独金利の低下が重しとなる中、1.09台前半で小幅安。ただ、その後発表の米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想を下回ったことやFRB高官のハト派発言もあり1.10手前まで急伸。14日、ユーロ/ドルは欧州株高を好感し1.10台前半まで上昇も、米7月消費者物価指数(CPI)発表直後はドル買い優勢となり小幅安。その後、米金利が上下する中で再上昇し、1.1047を付け年初来高値を更新し1.10台前半で引けた。15日、ユーロ/ドルは米7月小売売上高などの良好な結果を受け、ドル買い優勢となり1.09台半ばまで反落。その後は1.09台後半まで持ち直した。16日、ユーロ/ドルは米7月の住宅関連指標の弱い結果を受けドル売り優勢となり、1.10台を回復。その後、米8月ミシガン大学消費者マインドの市場予想を上回る結果に1.09台後半に戻し、その後は株式市場が堅調推移する中、再びユーロ買いが進み1.10台前半で越週。

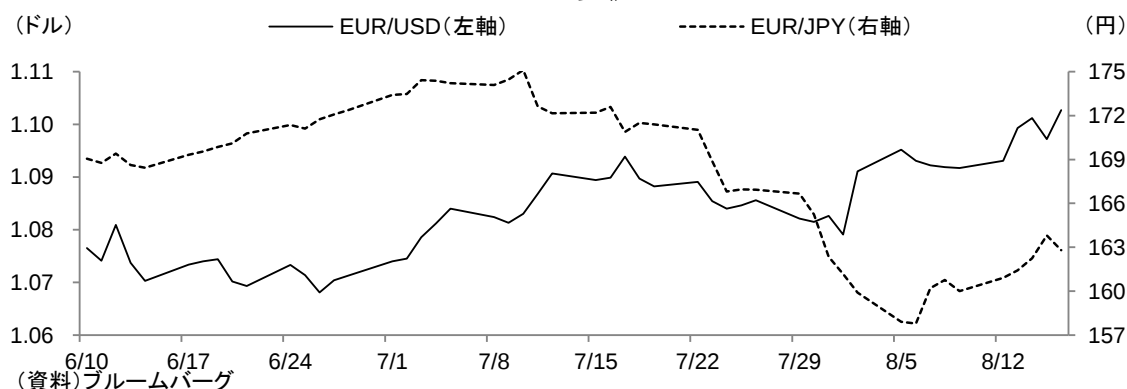
今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を予想する。足許でユーロ/ドルは米国の順調なインフレ鈍化に加え、リスクセンチメントの回復も材料に1.10台を回復した。ECBが6月に利下げに踏み切り、年内の利下げも相応に織り込んだこと、そもそもの政策金利の水準が他先進国と比べて低く、利下げペースの加速余地も小さいこともあり、ユーロ自体に大きな買い材料がない中でも相対的に買われる地合いが続く。ただ、先週公表の独8月ZEW景気期待指数は過去2年で最大の落ち込みとなったほか、ユーロ圏PMIなどは他先進国と比べて軟調な数字となっており、欧州の経済は米国と比較して決して堅調とは言えない状況。域内の政治リスクや、天然ガス価格の上昇などの不安材料を抱えるユーロを一段と買い進む材料は乏しいと考える。今週は22日(木)にユーロ圏8月製造業/非製造業PMIの公表を予定。製造業を中心に弱い結果となれば、欧州の景気後退リスクが改めて意識され、ユーロの押し下げ圧力に繋がろう。その他、22日(木)にユーロ圏4~6月期妥結賃金、ECB政策理事会議事要旨(7月会合分)の公表が予定。9月会合での利下げ期待が強まる内容となるか確認したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/12~8/16)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0912 高値 1.1047 終値 1.1028

(対円) 安値 160.34 高値 163.90 終値 162.80



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2700 ~ 1.3000 188.00 ~ 195.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンドは対ドルで約1.5%反発。14日に発表された米7月CPIが市場予想並みながらインフレの減速を示唆するものとなった一方、翌15日に発表された米7月小売売上高が市場予想を大幅に上回る結果となり、FRBが急速な景気後退を回避しつつ金融緩和に動くことができるのではないかと楽観が広がり、広範なドル安につながった。英国の経済指標は総じて底堅い景気と、賃金・インフレ圧力の緩やかな減速を示唆するものとなったが、イングランド銀行(BOE)の金融緩和のペースに影響を与えるものではなかったと見られる。市場の織り込みも11月会合での▲25bpの追加利下げが完全に織り込まれた状況に変わりがない。2024年4~6月期の英国GDPは、前期比+0.6%と前期(同+0.7%)並みの成長率を維持した一方、2024年5~7月の平均賃金の伸び率は前年比+4.2%と4~6月の同+4.4%から減速した。もっとも、6月の失業率は4.2%と5月の4.4%から低下しており、労働市場関連統計はまちまちな結果と言える。

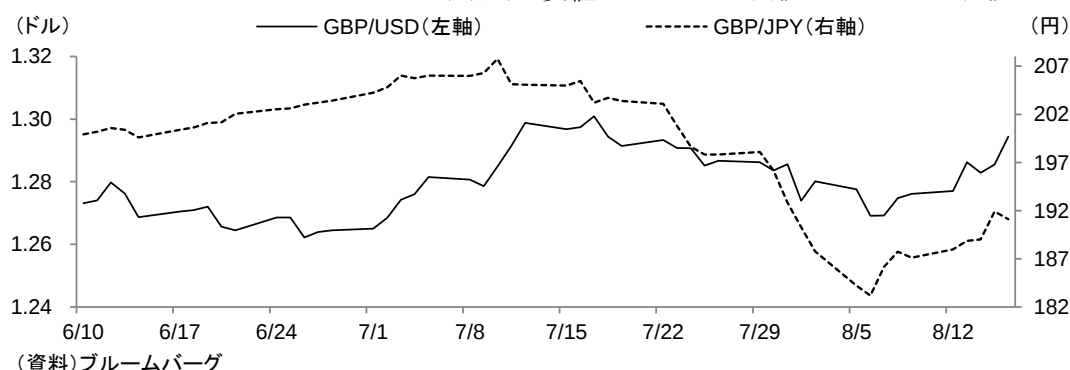
今週1週間は現在のドル安基調の強さを見極める展開となる。現在のゴルディロックス的な相場環境が続くかを見極めるうえで、ジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の公演(23日)は重要だ。同日にはベリリーBOE総裁の公演も控えている。市場の関心はパウエルFRB議長が8月の市場の混乱や、米インフレの減速に対する評価と、9月会合での利下げを示唆するか否かに集中するものと見られる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/12~8/16)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2747 高値 1.2945 終値 1.2942

(対円) 安値 186.97 高値 192.03 終値 191.11



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6750 94.50 ~ 100.00 円

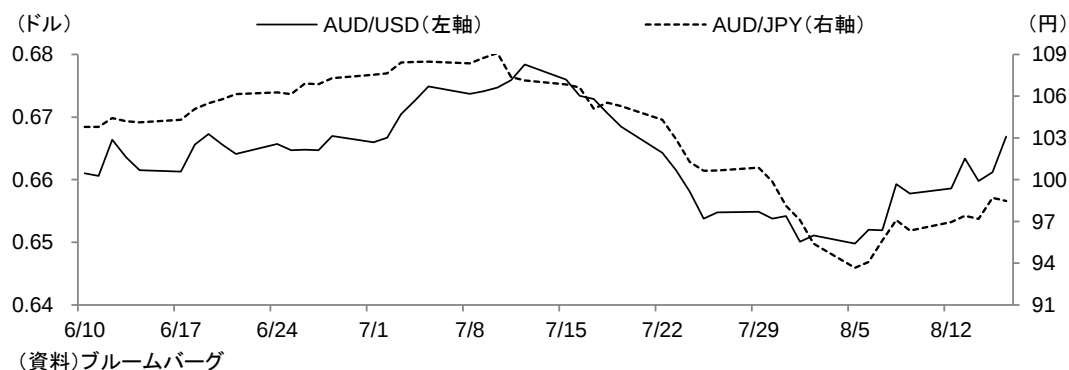
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週を通して堅調に推移。週初12日は0.6569で取引開始。東京休日で比較的流動性が低い中、アジア株が小確り推移すると、やや豪ドル買いが優勢な場面も見られたものの、14日に米7月CPIの公表などを控えているだけに方向感に欠ける展開。13日、公表された豪4~6月期賃金指数は強弱入り混じる結果。一方で、米国時間に公表された米7月PPIが市場予想を下回る結果。米国での物価上昇圧力が着実に緩和しているとの見方が広がりFRBによる利下げ期待が高まる中、豪ドル買いが優勢な展開となった。一方、14日にRBNZが景気の急減速とインフレ鈍化を反映し、予想よりも早いタイミングで▲25bpの利下げに踏み切ると、豪ドルも引きずられる形で下落する場面が見られた。加えて、15日に豪7月雇用統計が強弱入り混じる結果になると、発表直後には0.6572まで豪ドル安が進行した。もっとも、豪労働市場に大きな変調は起きていないとの解釈が市場で広がる中で、直ぐに下げ幅を縮小させ上昇に転じた。その後は、米7月小売売上高の堅調な結果を受け、豪ドルがやや弱含む場面も見られた。16日は米7月住宅着工件数や米8月ミシガン大学消費者マインドなどが公表されたものの、豪ドル相場への影響は限定的。一方で、非鉄金属価格が上昇したことにつられる形で米国時間の後半から豪ドル買いが優勢な展開となり、週を通しての高値圏である0.6671まで上昇し、週末を迎えている。

今週の豪ドル相場は、軟調な推移を予想する。今週最も市場で注目されているイベントと言えば、ジャクソンホール経済シンポジウムで23日(金)に行われるパウエルFRB議長の経済見通しに関する講演である。ここまでに公表された米国の経済指標を見ると、物価上昇圧力の着実な鈍化が確認出来る中、一部には弱い内容のものも散見されている。ただ、現時点で利下げを急ぐ必要性は未だ低いと考えられるだけに、ジャクソンホール経済シンポジウムでの講演では9月利下げに前向きな考えを示すものの、1会合で▲0.5%ポイントの利下げを意識させるような内容は出てこない可能性が高いと見ている。こうした状況ではドル買いが優勢な展開となり、その結果、豪ドルは軟調な推移を余儀なくされるであろう。加えて、豪州とのかかわりの強い中国経済が軟調な推移を続けていることも豪ドルが弱含むやすい材料として意識しておく必要があるだろう。ジャクソンホール経済シンポジウム以外の注目材料としては、20日(火)にRBA議事要旨、21日(水)にウエストバック景気先行指数、22日(木)に豪8月製造業/サービス業PMIなどの公表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/12~8/16)の値動き: (対ドル) 安値 0.6565 高値 0.6671 終値 0.6671
(対円) 安値 96.25 高値 98.91 終値 98.47



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。